

トレンド提言

秋の訪れ、読書の秋

解散・選挙

解散権は「首相の専権」といわれてきたが、憲法上では明文なく疑義のあるところ。その解散が小誌編集中に行われた。唐突な解散について大義はあるのか。

国よりも党 党より己れのための 選挙かな

政治の墮落は国民にしわ寄せされる。国民の責任で国民本位の民主主義を確立したい。

○秋に学ぶ

秋の訪れ。地球に異変があっても、今年も秋は訪れた。四季の変化は日本の特徴。それだけに秋の訪れは楽しくもあり、淋しくもあり年の瀬を控えて多忙でもある。秋をとらえておこうとする詩歌、たとえ、絵画などは数多ある。その一端に学んでみたい。英語では Autumn や Fall という表現だが、日本語では内心面から秋について多様な表現がみられる。表現方法は婉曲^{えん}で深みがあり、他人を傷つけない特徴を持っている。特にスマホ族の皆さまにお勧めする。

・秋についての表現・たとえ

秋空が^{あきらか}清明。収穫が^{あか}飽き満ちる。草木が^{あか}紅くなる。

太陽は^{ぜんじ}漸次南下し、昼は短く、夜は長くなる。

秋の鹿は笛に寄る。夏の間^{とき}に伸び広がった万物がぐっと縮む時

「秋高馬肥」、「秋意」、「秋興」（秋に感じる情趣）

「秋怨」、「秋思」（秋に感じるもの悲しさ）

「秋影」、「秋光」（秋の日の光）

「秋作」（秋の仕事。とり入れ）

「秋娘」（①美人②年をとって容色の衰えた女）

「秋水」（秋におこる洪水）

「秋霜烈日」（秋の冷たい霜と夏の強烈な日光、刑罰などきびしいたとえ）

「秋芳」（秋に咲く花。菊）

「秋波」（美人の涼しい目もと。女のこびる目つき。色目）

「秋刀魚」（さんま。形が細長く、刀に似ていて、秋に多くとれる）

「秋千」

「秋日が立つ」（飽き風のかげことば。男女間の愛情がさめる）

「秋の扇」（夏に使った扇は秋には要らなくなる。愛を失って捨てられた女。現実では男か？）

・百人一首にみる秋の歌

100首のうち22首も詠まれている。20首だけ紹介したい。
こんなに多いとは長年生きていて初めて知ることとなった。

「秋の田のかりほの庵の苫をあらみ

わが衣手は 露にぬれつつ」……………天智天皇

「吹くからに秋の草木のしをるれば

むべ山風を嵐といふらむ」……………文屋康秀

「月見ればちぢにもものこそ悲しけれ

わが身一つの秋にはあらねど」……………大江千里

「こころあてに折らばや折らむ初霜の

置きまどはせる 白菊のはな」……………凡河内躬恒

「山かはに風のかけたるしがらみは

流れもあへぬもみぢなりけり」……………春道列樹

「しらつゆに風の吹きしく秋の野は

つらぬきとめぬ玉ぞちりける」……………文屋朝康

「あらし吹く^{みむろ}三室の山のもみぢばは

たつたの川の錦^{にしき}なりけり」……………能因法師

「さびしさに宿を立ち出^いでてながむれば

いづこもおなじ秋の夕暮」……………良暹法師

「夕されば^{かどた}門田の^{いなば}稲葉おとづれて

^{あし}芦の^{まるや}丸屋に秋風ぞ吹く」……………大納言経信

「契りおきしさせもが露を命にて

あはれ^{ことし}今年の秋もいぬめり」……………藤原基俊

「秋風にたなびく雲の絶え間より

^も漏れ出^いづる月の影のさやけさ」……………左京大夫顕輔

「むら^{さめ}雨の露もまだひぬまきの葉に

霧立ちのぼる秋のゆふぐれ」……………寂蓮法師

○読書については古来さまざまな格言がある

・読書の意義に関して

どくしょ よみち あんないしゃ
「読書は夜道の案内者」

本を読むことで、未知の領域について知識を広めることができる。

どくしょしょうゆう
「読書尚友」

「尚」は上の意を”過去にさかのぼる意”

古典などを読んで、昔の賢人を友とすることができる

・読み方について

どくしょひゃっぺんぎおのずあらわ
「読書百遍義自ら見る」

難しくてわかりにくい書物も、いくども繰り返して読めば、ひとりで内容がわかってくる

どくしょさんとう
「読書三到」

読書に役立つ三つの方法＝読書訓＝熟読

まず目でよく見る＝眼到

次に声をだして読む＝口到

そして心を集中して読む＝心到

・読書に熱中

どくしょざんまい
「読書三昧」

読書にふけること。

「三昧。(雑念を捨てて、心を一点に集中する (仏教語))」

どくしょぼうよう
「読書亡羊」

読書に夢中になり、放牧していた羊を逃がしてしまったということから、ほかのことに心を奪われて肝心の仕事をおろそかにすることのたとえ

○読書離れ

文化庁調査（2014年10月）をみる

文化庁が実施した「国語に関する世論調査」によれば、1カ月に3冊以上の本を読むと回答した割合は17.9%で、「読書量は減っている」と考える人が65.1%に上った。

・すべての年代で「読まない」増加

文化庁の「国語に関する世論調査」は、全国の16歳以上の男女3000人を対象に実施。電子書籍を含む読書量の変化などについて今年3月にアンケートを行い、集まった回答を半年かけて分析した。

それによると、マンガや雑誌を除く1カ月の読書量は、「1、2冊」と回答したのが34.5%、「3、4冊」は10.9%、「5、6冊」は3.4%、「7冊以上」が3.6%だったのに対し、「読まない」との回答が最も多く、47.5%に上った。前回調査（2009年）に比べ、1冊も読まない割合は1.4ポイント増加、2002年実施の前々回調査からは10ポイント近く増加しており、日本人の読書離れが浮き彫りになった格好だ。

とくに高齢者に「読まない」割合が高く、70歳代以上で59.6%、60歳代で47.8%に上った。一方、20歳代は40.5%、10歳代（16～19歳）は42.7%だった。

文化庁によれば、高齢者の場合、視力の悪化など健康上の理由が大きいとみられる。とはいえ、2002年実施の調査に比べ、すべての年代で「読まない」割合が大幅に増えているのも事実。文化庁関係者は「2009年実施の調査で国民の読書量の減少が明白となったが、その後も改善されていない」と憂慮する。

・1冊でも読めば魅力が分かる？

読書量の減少は、国民自身も認識しているようだ。「以前に比べ（自分の）読書量は減っている」と答えた割合は65.1%、「それほど変わっていない」は26.3%、「増えている」は7.4%にとどまった。

減少の理由について聞いたところ、最も多かったのは「仕事や勉強が忙しくて読む時間がない」の51.3%、次いで「視力など健康上の理由」が34.4%、「（携帯電話やパソコンなど）情報機器で時間が取られる」が26.3%、「テレビの方が魅力である」が21.8%など。このうち「情報機器」を理由とした回答は、2009年実施の調査に比べ11.5ポイントも増加した。

興味深いのは、1冊でも読んでいる人と、1冊も読まない人との意識の違いだ。「自分の読書量を増やしたいと思うか」との質問に、1カ月に1冊以上本を読ん

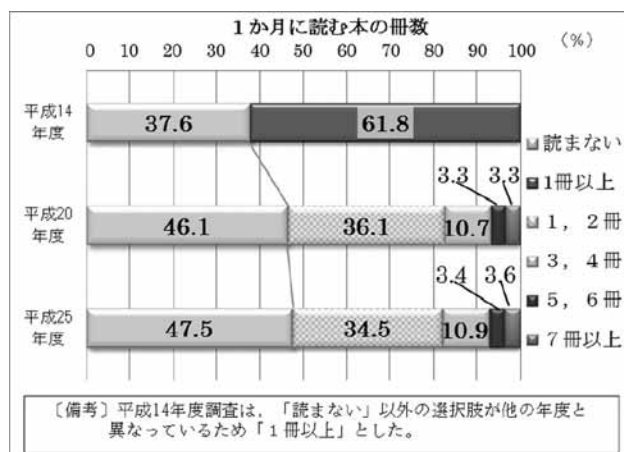
でいる人の77.1%が「そう思う」と回答。しかし1冊も読まない人は54.5%にとどまった。逆に、「増やしたいとは思わない」との回答は、読んでいる人では22.6%だったのに対し、読まない人は2倍の44.7%に上った。

○読書についての質問

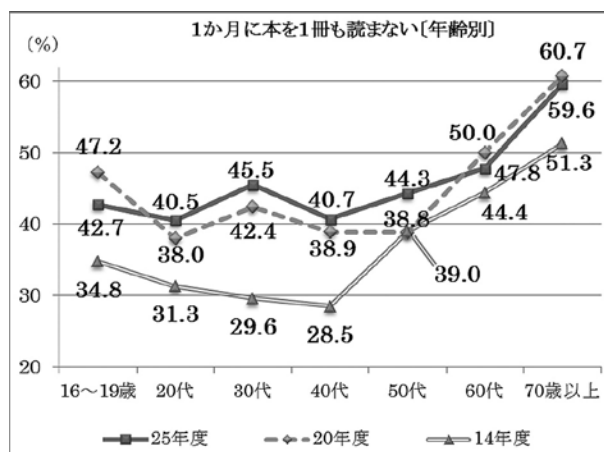
Q1… 1か月に読む本の冊数について。

A… 1か月に本を1冊も「読まない」と、47.5%が回答。

〔全体・過去の調査と比較〕



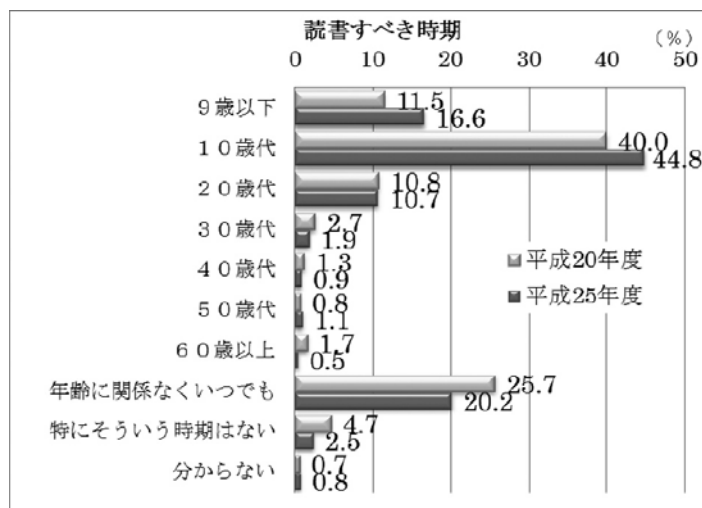
〔年齢別・過去の調査との比較〕



1か月に本を1冊も「読まない」と回答した人（全体の47.5%）を年齢別に見ると「読まない」の割合は、70歳以上（59.6%）で他の年代よりも高く約6割となっている。一方、20代（40.5%）及び40代（40.7%）では他の年代より低く、約4割となっている。過去の調査結果（平成14、20年度）と比較すると、全ての年代で平成14年度調査より「読まない」の割合が増加している。

Q2… 人が最も読書すべき時期はいつ頃だと考えるか。

A… 「10歳代」が、44.8%で最も高い。



〔全体・過去の調査との比較〕

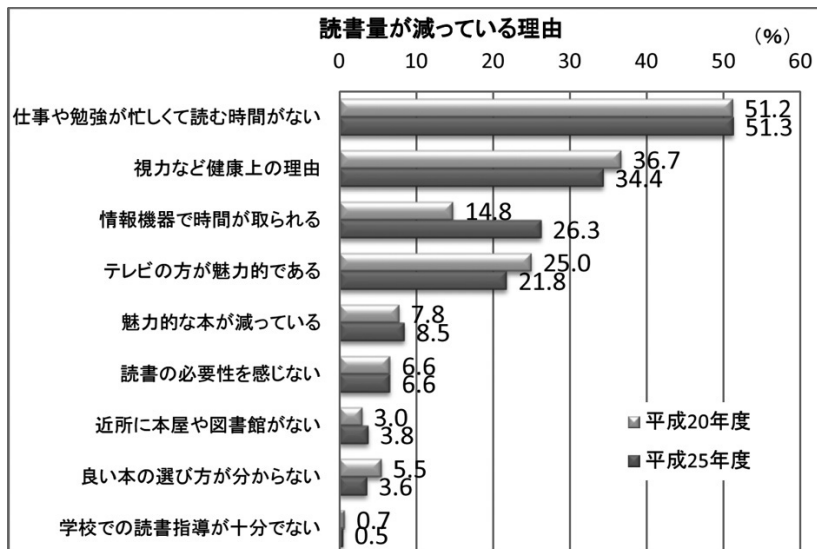
人が最も読書すべき時期はいつ頃だと考えるかを尋ねた。

Q3…読書量は以前に比べて減っているか、増えているか。

A…「読書量は減っている」と、65.1%が回答。

	平成25年度	平成20年度
読書量は減っている	65.1	64.6
読書量はそれほど変わっていない	26.3	25.3
読書量は増えている	7.4	8.6

(数字は%)



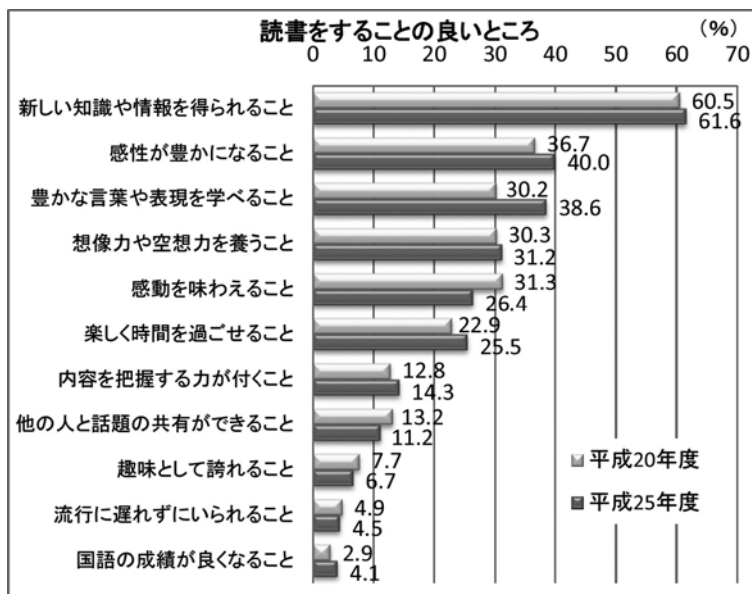
(理由・過去の調査との比較)

「読書量は減っている」と回答した人（全体の65.1%）に、読書量が減っている理由を尋ねた。（選択肢の中から二つまで回答。）過去の調査結果（平成20年度）と比較すると、「情報機器（携帯電話、スマートフォン、タブレット端末、パソコン、ゲーム機等）で時間が取られる」の割合が12ポイント高くなっている。

Q4…読書をする事の良いところは何だと思うか。

A…「新しい知識や情報を得られること」と、61.6%が回答。

(全体・過去の調査との比較)



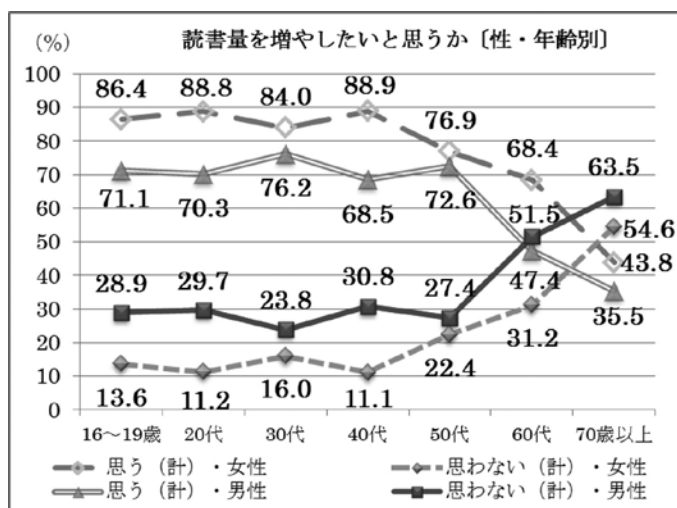
Q5…自分の読書量を
増やしたいと思うか。

A…「増やしたいと思う（計）」
と66.3%が回答。

思う（計）		思わない（計）		わからない
66.3		33.2		
そう思う	ややそう思う	あまりそうは思わない	そうは思わない	0.5
36.8	29.5	20.0	13.2	

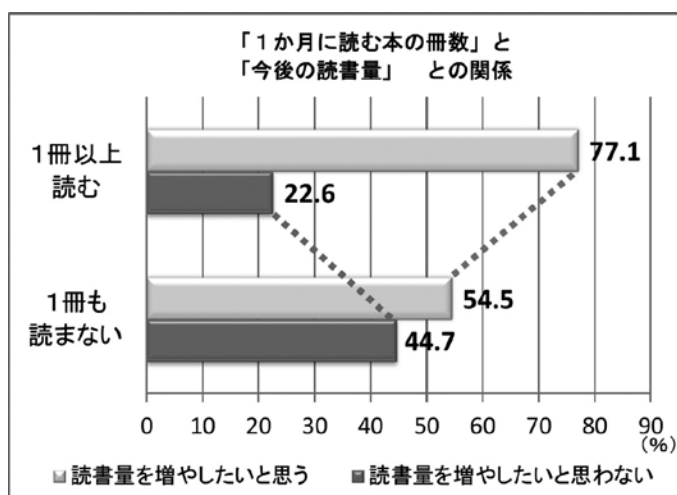
(数字は%)

(性・年齢別)



Q6…1か月に読む本の冊数、
及び今後の読書量に
ついて。

A…1か月に本を1冊も
読まない人のうち、今後、
「読書量を増やしたいと
思わない」は、44.7%。



Q7…電子書籍（雑誌や漫画も含む）を利用しているか。

A…「利用する（計）」と、17.3%が回答。

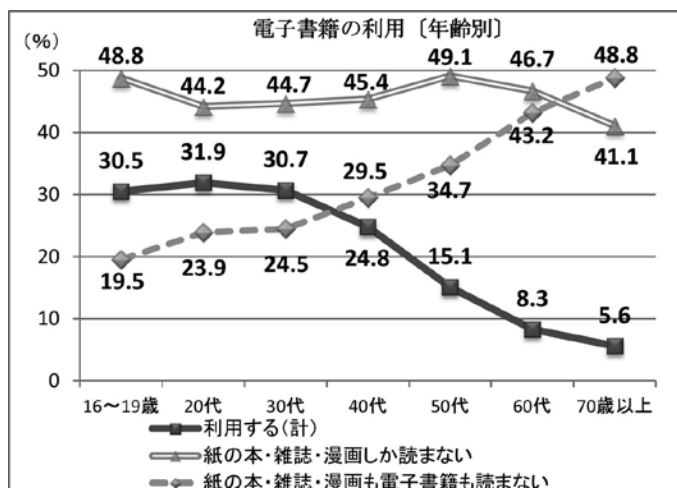
(全体)

ふだん、電子書籍（雑誌や漫画も
含む）を利用しているか尋ねた。

利用する（計）	
17.3	
よく利用する	たまに利用する
4.6	12.6
紙の本・雑誌・漫画しか読まない	
45.2	
紙の本・雑誌・漫画も電子書籍も 読まない	
35.9	

(数字は%)

(年齢別)



Q8…電子書籍と紙の本・雑誌・漫画と、どちらを多く利用するか。

A…（電子書籍を「利用する（計）」と回答した人（全体の17.3%）に質問。）

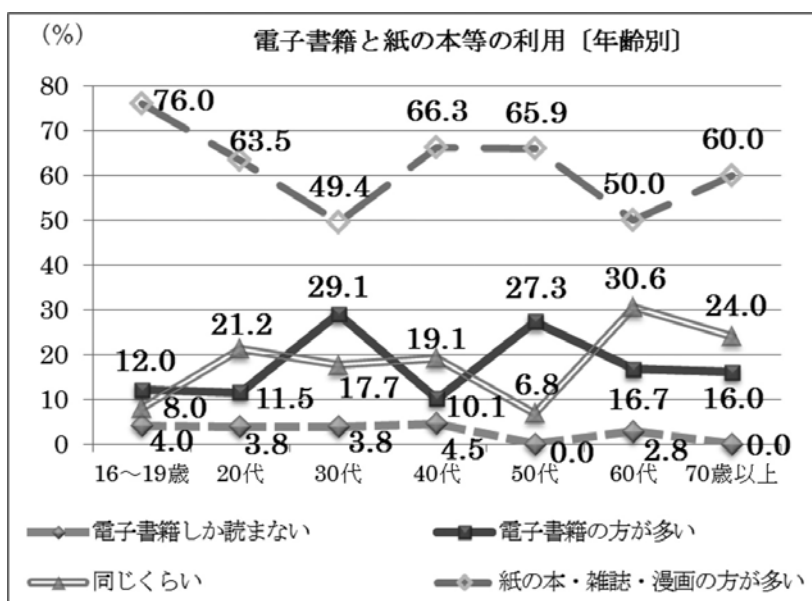
「電子書籍の方を多く利用する」は、30代と50代で他の年代より高い。

〔全体〕

電子書籍しか 読まない	電子書籍の方が 多い	同じくらい	紙の本・雑誌・漫画の 方が多い
3.1	18.0	18.3	60.6

（数字は%）

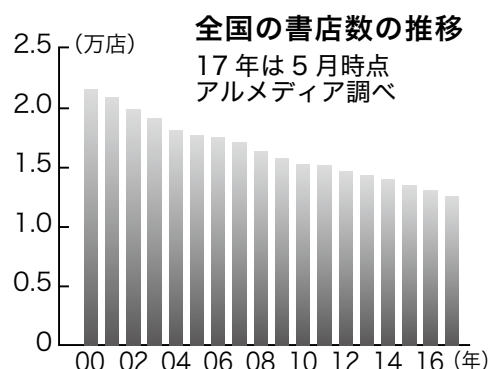
〔年齢別〕



○書店の減少

・地域文化の拠点とも言える町の書店が減少している。

書店が地域に一店舗もない「書店ゼロ自治体」は全国都道府県で420の自治体・行政区にのぼり、全国の自治体・行政区(1896)の2割を占めているという。



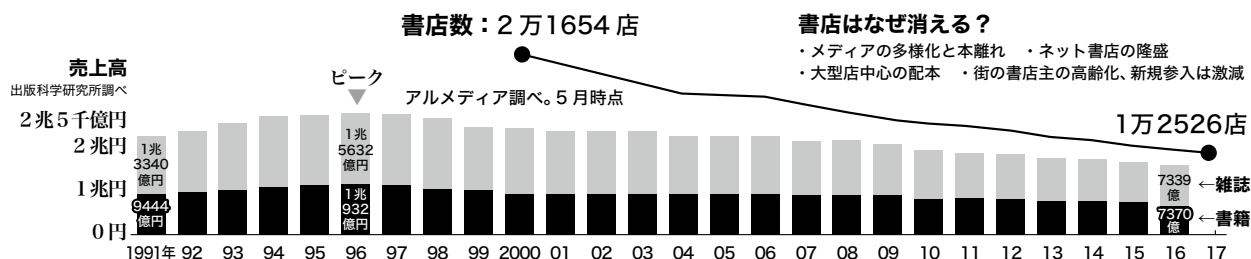
書店ゼロ自治体の数

北海道	青森	岩手	宮城	秋田	山形	福島	茨城	栃木	群馬	埼玉	千葉	東京	神奈川	新潟	富山
58	12	7	6	9	10	28	3	2	13	9	8	9	4	4	2
石川	福井	山梨	長野	岐阜	静岡	愛知	三重	滋賀	京都	大阪	兵庫	奈良	和歌山	鳥取	島根
1	3	8	41	6	4	2	7	2	4	5	2	19	9	4	4
岡山	広島	山口	徳島	香川	愛媛	高知	福岡	佐賀	長崎	熊本	大分	宮崎	鹿児島	沖縄	
3	3	4	7	0	3	15	17	4	3	18	1	8	9	20	

（トーハン調べ。2017年7月末現在）

○地域書店減少の原因をどうみるか

「一般的に書店は、売上げの75%前後を取次会社などに支払い、家賃や人件費など経費が20%余りかかるため、利益は2%前後とされる。出版取り次ぎ大手のトーハンが市内で書店を開いた場合の売上高を試算すると、月200万～600万円だった。「最低ラインは1千万円。出店不可能といわざるをえない」といわれている。



街の書店が減少する原因は以上のほか次のことが考えられる

- ・メディアの多様化と本離れ
- ・ネット書店の台頭
- ・大型店中心の配本
- ・町の書店主の高齢化
- ・少子高齢化

書店の減少は町の活性化にとって大きなマイナスだ。書店を地域文化の拠点として位置づけ自治体の協力などにより地域創生を目指したいものである。

現代社会の流れは「小利を求める」「結果を重視する、結果偏重主義」傾向が強いといえる。

「思考」「思索」そしてそこから発生する「比較力」「批判力」は軽視されている。「AI時代」の到来でこの流れはさらに深化するとみられる。

読書離れ、本屋の減少はこうした社会的背景があることを見逃してはなるまい。「スマホ」機能の利便性は了とするが、そこで「人間は考える^{あし}葦である」という特権が失われてはならない。

読書は考えることの素であり、喜怒哀楽の根源ではないだろうか。スマホや人工智能に依存する生活の中からは愛も憎しみもそして心のこもった会話や論議も期待できないのではあるまいか。

好奇心を旺盛にして読書を通じて学び、創造力、想像力を豊かにし、己れと社会の知的活性化を目指したいものである。